
【春の陽気に誘われて】

ーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【春の陽気に誘われて】

【Zコード】

Z2745D

【作者名】

一わん

【あらすじ】

ハヤ×泉のほのぼのです。と言つても、ハヤテは…

ポカポカ陽気に優しい風が流れる春の世界。

今は昼休み、この時が学院内で一番季節を感じられる時間帯だ。周りの鳥達は、春を喜ぶように飛び周り花と共に風と流れている。その中にはチャーフもいて家族で楽しそうだ。

そして、もう一人。

るん るん るん と軽快な足どりで軽いリズムを立てる女の子。二コニコスマイルを向けながら（誰に？）楽しそうに廊下を歩く。髪を軽く結んで両側からでているピ翘髪が、その少女の心に合わせてピョコピョコと動いている…よしに見える。ふと、彼女は足を止めた。そして…

「暇、だ〜〜〜」

叫んだ。もうこれ以上なく叫んだ。自分の全てをさらけ出すようにな、おもいつつきり叫んだ。

心の中で。

…そう、瀬川泉は今、ものすゝじく暇をしている。
その理由とは、例外はあるだらうが、まあ例によつてはあの一人がいなかからで、

「美希ちゃんも理沙ちゃんも、風邪で休みだなんてえ」

ハア〜と溜め息をつく泉。結ばれた髪もショーンッとひつひつ向いた。

「バカは風邪ひかないのに〜」

おこおこーそれはちよつと失礼なのは…まあ、ホントの「」
だけど。

「つまんない～～～～

再び叫んだ泉。もちろん心の中で。

「ハヤ太くんもいないしい～」

ハア～～と、本日一度田の溜め息をこぼす。この調子でこつたら、
間違いなく自己ベストを更新するだろ？（何の？）

「何かないかな～」

そう呟きながら、泉は『楽しいモノ』を探した。
さつきまでは暗い表情をしていたのに、今ではもう『樂』の顔だ。
（この娘って、ホントに表情が口々口々変わるなあ～）
と、若干三十歳？の窓が皆さんの言葉を代弁してくれた。

「あつ～～」

（えつ～なに～？）

と急な泉の反応に驚く窓。

泉は外に何かを見つけたのか、窓に手をあてそれを見つめる。

「あれはつ～～」

キュピーンと泉の目が光る。

そして、瞬く間にその『楽しいモノ』へと走つていった。

緑が色つくその場所に少年が一人いた。

白いベンチに座り、自然のまま、この季節を感じている。ふとつ、一條の風が周りの樹木を揺らした。それにより、一斉に

踊りだす緑の子供達。

力サカサカサ、力サカサカサとみんながみんな騒ぎだす。だが、そこにいる少年は周りの状況とは反して全く動こうとはせず、その水色の髪がなびくだけ。

そんな光景がここに存在する。それは、少年と自然との自分達のセカイ。お互いがお互いに自分達のトキを過ごす安らぎの時間。だが、そんな彼らのセカイに侵入する者が一名。

ソレはそろそろりそろりと、少年の背後から近づく。

音を出して気付かれるようなへマはしない。音を殺して歩み寄る。

一步

また一步。

ソレが踏み出す度に少年との距離が無くなつていいく。やがて、少年の背後にまでソレはきた。

満面の笑みを浮かべるその侵入者は、自らの手を少年の両肩から前に出し、顔を覆つた。いや、目を隠した。そして…

「だ〜〜れだつ」

泉はハヤテに定番であるアレをした。

⋮

ノーリアクションッ！！

反応がないハヤテに泉は

「んつ？」と疑問を浮かべた。

覆つた手を戻し横顔を覗き込む。

見ること数秒。

何かに気付いた泉は前に移動し、今度は前から覗きこんだ。

(あはつ)

見ると、ハヤテは眠っていた。

スゥ～、スゥ～とした息使いで、目は瞑られており、安らかな寝顔をしている。

そんなハヤテを見た泉は、

(ハヤ太くん、寝ちゃってる～)

と好奇心一杯であらゆる角度から観察した。

右から左へ、前から後ろ、とチヨコチヨコチヨコチヨコ動き回る。拳句の果てには、ハヤテのほっぺをシンシンシン。

(ハヤ太くん可つ愛いい～)

と、まだまだそれをやめようとしない。

(おい！寝てる相手を起こしちゃ可哀想だろ！)

と風がツツコンで見るものの、髪が少し揺れるだけで効果がない。そして、また更に、泉の行動がヒートアップした。

つつくはつねるは、触るは撫でるはのやりたい放題。それがとても柔らかくて、

(可愛いいい)

とますます回転が上がる一方。

そんな泉は、もお、どおーにも止まつらつない

そして、どうして持っているのか、黒ペンをポケットから取り出す。

キュポッ

という音がして、泉はそれをハヤテの顔に近づけていった。

(いつたずうらつ いつたずうらつ)

るん るん るん といった感じで楽しそうにと黒ペンを近づける泉。

一方のハヤテはそんな怪しい気配には気付かず、スヤスヤと眠り

についている。

泉の目には無数の星が現れ、キラキラと輝いている。

そう、それは近づくにつれより一層輝きます。

ハヤテの顔に黒がつくまであと30cm

：20cm

：10cm

この辺りから、インクの匂いがハヤテの鼻につく。だが、起きる
気配は全くしない。

：5cm

もう少しで本当にペン先が触れる。ああ、悲しいことこのペ
ンには白で『油性』と書かれている。

一体どんな顔になるか、それはそれで楽しみだ。
そして、

：3

：2

：1

ピタッ

ハヤテの頭に一色の黒が舞い降りた。

その鮮やかな黒は着地したと同時に、広げたものを折り畳んだ。

：

泉の手が止まった。

握られたペンはそこから何も動くことはしない。

それは、泉自身も同じことで全くの無反応。只々ハヤテを見る

ばかり。

いや、ハヤテではなく、ハヤテの頭に乗っている、その黒の…蝶を。

それはヒラヒラとやつて来て、自分がペンを付けようとした矢先に、それが先に着いた。

だから、泉は瞬きも忘れその光景をずっと見た。頭に乗った蝶はそのまま一步も動こうとはしない。活動を止めたその羽は黒一色。と言つても、漆黒の羽とそこに描かれた、灰色っぽい黒の模様で二つで一つだ。

その模様が妙に幻想的で、泉は魅とれてしまった。いや、模様だけではない。ここにあるセカイ、全てのモノに泉は魅とれてしまったのだ。

ふと、視線を下に降ろした。

ハヤテの顔が視覚に入る。

(あつ)

「…」で、よつやく泉はハヤテの顔を真剣に見た。

(笑つてゐる…)

安らかな笑みをして、無防備過ぎるハヤテの寝顔。女性のような端正な顔立ちを何一つ崩さず、『幸せ』を浮かべている。それに泉は、

(なに…これ…)

何か、心に今まで感じたことのない不思議な感覚を感じた。熱を帯していく頬を感じながら、泉はハヤテの頬に手を触れた。それは先ほどまでとは違う、とても優しい触り方。まるで、赤子に触れる母親のように…

「綺麗だなあ」

素直な感想を述べる泉。手にはますます優しさが溢れ、その行動はまだ続く。

泉は魅了されてしまったのだ。春の陽気を身に包み、この白いベ
ンチに眠る、春の女神に。

しばらくして、泉はハヤテの頬に触れる手を引いた。
そして、

「やつぱり、やめたつ」

と呟き、ペンを握った手を戻してフタをした。

何故そうしたのか、それは泉自身もよくわからない。何となく感情に流されただけなのか、何となく罪悪感を感じたのか。まあ、おそらくは前者になるだろ？

そう、これは気まぐれなのだ。

気ままに泳ぐ暁のように、心は日々流されるだけ。
だから、

「ふあ～～～～」

（何だか眠くなつて来ちゃつたあ）

これも同じ。

眠気に襲われた泉は口を開け、それを隠すように手をそこにやりつて、大きく大きく欠伸をした。

「春眠暁を覚えず…」この季節はよく言つ。それはまさしくその通りで、泉が眠たいのも、ハヤテが眠つているのも全て、今が春だから。だから、今の眠気は心が春に流された、只、それだけのこと。

泉は眠たそうな目で再びハヤテを見た。

今日何度も見ただその寝顔についてい氣が緩んでしまつ。
本当にとても気持ち良さそうだ。

(私も…寝ちゃおつ)

そう思つた泉はハヤテの隣に腰を降ろした。

そして、泉は春に誘われるままで、今のこの感情に流れられることにした。

春の陽気に包まれたこの昼休みに、白いベンチで、穏やかな寝顔で眠る二人の男女。

それがとても幸せそだつたので、若干30歳(?)の窓は頬を緩めながら、一階から温かくその光景を見守つたのだつた。

(ふふふ)

end

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2745d/>

【春の陽気に誘われて】

2010年12月4日15時17分発行